

### Ⅲ 平松一夫先生を偲んで

国際会計研究学会第 8 代会長の平松一夫先生が令和 2 年 12 月 2 日に逝去されました。享年 73 歳でした。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げ、鎌田信夫・野村健太郎・古賀智敏・橋本尚・杉本徳栄・山田辰己の各先生より寄稿された追悼文を掲載することに致します。



#### 平松一夫教授を偲んで

鎌田 信夫（国際会計研究学会第 7 代会長・南山大学名誉教授）

平松一夫先生還暦記念出版委員会は、2007 年に、『国際財務報告論—会計基準の収斂と新たな展開—』（平松一夫編著）を出版された。そこで、私はこの著書によりながら平松学兄の研究の成果と姿勢を偲んでみたい。本書は、学兄のほか平松ゼミ生とゼミに所属した研究者 15 名が国際会計基準審議会（IASB）の「概念フレームワーク（CFW）」（1989 年）と会計基準および日本の財務会計基準委員会（ASBJ）の「財務会計の概念フレームワーク（CFW）」（2006 年）と会計基準を取り上げて、それらの対立と収斂を検討している。そこで、私もそのなかの基本的な 3 つの事項、すなわち 1.財務報告の目的、2.資本維持および 3.キャッシュフロー計算書の有用性について、「対立と収斂」の議論に参加して論じてみる。

##### 1. 財務報告の目的

IASB は CFW で「財務報告の目的は、現在および潜在的投資者、融資者およびその他の債権者が企業への資源の提供に関する意思決定をする時に、報告企業について有用な財務情報を提供することである」と述べ、財務報告は一般目的を指向することを明らかにしている。これに対して、企業会計基準委員会（ASBJ）の CFW は「財務報告の目的は投資家の意思決定に資するディスクロージャーの一環としての成果を測定し開示することである」と述べて、報告目的を「投資家の意思決定」に限定している。

平松学兄は、利用者について IASB の CFW と ASBJ の CFW とは基本的思考が「対立」していることを指摘し、学界に IASB と ASBJ との相互理解が得られるよう努力することを要請している。われわれは、この要請に応えなければならないという大きな課題を担うことになった。私は、財務会計は、投資者だけでなくその他の利用者にも適切な情報を提供するという役割を持ってきたから、一般目的を指向するものでなければならないと考えている。IASB は、利用者として現在の投資者および潜在的な投資者以外に融資者や仕入先などを含めているが、主たる利用者（primary

user) は、実際には投資者であるとみている。それは出資者に対する企業の 1.経済的資源, 2.請求権および 3.経済的資源の利用に関する情報は、他の利用者の情報ニーズにも適合すると考えているからである。したがって、この点では ASBJ の CFW が IASB に収斂する可能性は残されている。

## 2. 資本維持

資本維持とは期首資本を維持することをいう。期末資本が期首資本を超過していれば、その差額は利益であり期首資本は維持されているとみる。これに基いて、1 企業の j 期の利益と期首資本および期末資本との関係を下の等式で示すことができる。

$$j \text{ 期の利益} = j \text{ 期の期末資本} - j \text{ 期の期首資本} \quad \text{INC}_j = W_j - W_{j-1} \quad (1)$$

これに j 期の配当および資本の払い込みを含めると (1) 式は次のようになる。

$$j \text{ 期の利益} = j \text{ 期の資本主とのキャッシュフロー} + j \text{ 期の純資産の差額} \\ \text{INC}_j = \text{CF}_j + (W_j - W_{j-1}) \quad (2)$$

名目資本維持の時は、利益は (2) 式のとおり計算される。このように利益を計算するため、期末資本から期首資本を差し引くことは一般に承認されている。しかし、この期首資本が何であるかについては一般的な承認はない。多くの場合、これは名目貨幣資本が用いられているが、その他に購買力貨幣資本と実体資本が用いられることもある。購買力資本維持による時は、名目貨幣資本による利益のうち「一般物価水準の増加を超える部分」を利益とする。物的資本維持による時は、その期間に増加した現在原価を利益とする。したがって、保有資産および負債の価格変動は、それらの測定尺度の変動で利益ではなく、資本維持修正額として処理する。IASB の CFW は、これらの 3 つの資本維持モデルの選択を経営者の判断に委ねている。これに対し、ASBJ の CFW は、資本維持について全く述べていない。しかしながら資本維持は利益測定の基本的前提であると理解されているから、ASBJ は資本維持について CFW で明記しておくことが望ましい。

## 3. キャッシュフロー財務業績

IASB の CFW は、財務業績として発生主義会計による財務業績の他に、過去のキャッシュフロー業績を取りあげている。IASB の国際会計基準 7 号 (IAS7) は、「キャッシュフロー計算書は、他の財務諸表とともに利用される場合、利用者が企業の資金創出能力と企業が資金をどのように利用しているかを評価するために役立つ情報を提供する」と述べている。言い換えれば、キャッシュフロー計算書は取得原価評価、原価の期間配分および収益費用の対応による利益計算を中心とする会計 (発生主義会計) の欠点を補完するために財務諸表のひとつとして加えられた。これに対して ASBJ の CFW では、「財務諸表における認識と測定」でキャッシュフローに言及しているが、キャッシュフロー計算書の財務諸表における位置づけあるいは役立ちについて全く述べていない。平松学兄は IASB の方向性に対して、「キャッシュフローを損益計算のアンカーとして機能させるために、企業が成立してから解散するまでの全期間のすべてのキャッシュフロー (収入と支出) を、成果中性的なものを除いて、各期間に収益または費用として配分する思考がなお存在する」ことを指摘している。この指摘は、ASBJ の CFW を理解するため極めて適切である。IASB と ASBJ の CFW の根底にはこのような思考の対立が認められる。

平松教授は、学会運営にいつも積極的に参加していた。特に私が会長であった 2000 年の第 17 回大会は、国際会計教育研究学会（IAAER）と共催で、“Challenges for Accounting in the Global Economy” という統一テーマで行われた。この時、学兄は IAAER の Director として大会運営に参加し、外国からの多数の出席者に幅広く対応していた。また学兄はアジア会計研究学会（AAAA）の創立のため創立者の側に立って努力していた。AAAA は AAA（アメリカ会計学会）の国際部長（当時）Saudagaran 教授によって創立の準備が進められ、2000 年 8 月に創立総会がシンガポールで開催された。学兄は、私を含む数名の日本からの参加者とともに、創立総会や当日の研究報告会の準備を引き受けていた。

わが学会が平松教授を突然失ったことは、国際会計の研究や学会運営の上で学会にとって大きな損失であったが、学兄が指示されたガイドラインを参考に、国際会計の研究と教育をより前進させていかなければならない。

最後になりましたが、会員の皆様とともに平松教授のご冥福を心からお祈り申し上げます。

## 平松一夫先生の御逝去に接し

野村健太郎（国際会計研究学会第 10 代会長・大分大学名誉教授）

平松一夫先生が令和 2 年（2020 年）に御逝去されました。誠に残念、心より哀悼の意を表します。まだお若くして（日本人の平均寿命に比べて）、亡くなられたことが悔やまれてなりません。

先生との思い出の一つとして、ミュラー／ガーノン／ミーク『国際会計入門』（中央経済社）を、共同監訳者として、一緒に作業を進めたことが感慨に憶えます。本書は第一版、第二版、第三版として版を重ね、多くの読者から愛読を受けました。共訳に参加された方々と共に力を合わせて作業を進めることができたことを懐しく想起され、訳語の統一、簡明な文章を書くことを若い各先生方と力を合わせる事ができ、誇りに思います。

本書は、グローバル経済にあつて、主に米国に本拠地を置く多国籍企業集団がグローバルに活動するに際して、政治的、経済的、技術的、文化的、法的な環境が相違する世界各国において、如何に持続可能な形で存在するかを各指標を基にして探求したのですが、それは、日本に本拠を置く多国籍企業にも妥当するものとして、多くの読者から賛同を得ることができました。グローバル次元で連結経営の意義を問うもので、今日でも通用する概念と思われまふ。エンティティーとしての企業集団を考慮した国際会計入門としてふさわしい著書であります。このような著書を共同監訳者として平松先生と協働できたことに対して誇りに感じます。

先生の御研究の特徴は、企業情報の開示に向けられるもので、『外部報告書会計』にその特徴を見ることができます。情報の測定の側面に注力されず、開示の面に力を注がれ、多くの業績を残されました。国際会計研究学会の他、ディスクロージャー研究学会や日本経営分析学会の役員として活躍されたことからその特徴が窺われます。

また、御著書『年次報告書会計』により、日本会計研究学会「太田賞」を受賞されたことも注目されます。海外では、とくにインドネシアの会計教育にも関心をもたれ、多くの業績を残されまし

た。インドネシアに早くから関心を持たれ、その会計教育に研究対象とされたことには注目するに値すると思います。

先生が増谷裕久先生（元関西学院大学教授）の愛弟子としてその薫陶をうけられたことは特筆に値するもので、恩師を大切になさる点は、傍からみても微笑ましいものでした。その師弟愛は先生の後継者として活躍している弟子の諸先生にも受けつがれているものです。

以上は、平松先生の学問、学界活動を中心に見てきたものですが、その他、大学の運営に対しても尽力され、関西学院大学の学長として重責を全うされ、同大学の発展に寄与なされたことが注目されます。学長職という激務をこなされたことは、まさに賞讃されるべき出来事と申せましょう。

以上のように、学問の世界、学界活動、大学運営に多大の御貢献を残された平松先生に深い感謝の念を申し上げます。霊界においても、カラオケに御一緒に楽しく過ごしたく存じます。しばらくお待ち下さい。いずれそちらに参りますから。平松一夫先生サヨウナラ、またお会いしましょう。一文を草しました。心から哀悼の意を表します。

## 平松一夫先生のご逝去を悼む

古賀 智敏（国際会計研究学会第 11 代会長・東海学園大学）

2020 年 12 月 2 日、わが国会計研究・教育・制度を長年にわたって牽引してこられた関西学院大学の平松一夫先生の突然の訃報に接し、言葉を失った。最近、体調が良くないとは側聞していたが、IFRS 会計の教育・制度のパワフルなリーダーのあまりに早すぎる永遠の旅立ちに、同世代の学界人の一人として様々な場面での思い出が去来した。

平松先生のお名前を初めて印象づけられたのは、私が 1980 年代初頭に N Y での会計事務所から帰国して大学に初めて奉職するようになった頃のことであった。大学院指導教官でいらした武田隆二先生（神戸大学に、かつて大学院で情報会計の萌芽期に情報会計の質的特性を研究していたこともあり、わが国での当時の最新の研究動向をお聞きした折に紹介していただいたのが、後に平松先生の学位論文となった『外部情報会計 会計代替案選択問題の研究』（1980、中央経済社）であった。その後のわが国での会計情報の価値関連性実証研究の基盤となるアメリカでの情報会計の研究を理論的に体系化された研究書であり、当時の最新研究であった。これが平松先生のお名前を印象づけることになり、その後の先生の会計研究や国際会計研究の礎となったことは、想像に難くない。

平松先生のわが国会計研究学会、とりわけ国際会計学会に対する圧倒的な貢献は、端的に言えば、今世紀 IFRS の制度の導入と進化・発展に向けての制度基盤のフロントランナーであり、IFRS を抱き込んだわが国会計制度・教育普及の立役者の一人として名声を高められた点である。平松先生の関係著作を拝見するだけでも『会計制度改革と企業行動』（共編著 2004）、『会計基準の国際的統一—国際会計基準への各国の対応』（共編著 2005）、『国際財務報告論 会計基準の収斂と新たな展開』（編著 2007）、『IFRS 国際会計基準の基礎』（監修 2011）、及び『体系現代会計学第 4 巻会計基準のコンバージェンス』（共責任編集 2014）等、わが国 IFRS 会計の歴史的足跡そのものである。

平松一夫先生のもう一つの側面は、広くわが国会計基準・制度のグローバル化を促進し、広く世

界に向けての発信ネットワークを構築された点である。わが国企業会計の先駆者として、国際会計研究学会第2代会長の中島省吾先生が著名であるが、平松先生は、中島先生と一緒にアメリカに同行され、それが後に平松先生がグローバルな舞台上で活躍される一つの大きな基盤となったこと、想像に難くない。その詳細は2013年12月に中島先生がご逝去された時の平松先生の追悼文の中に詳述されている（国際会計研究学会年報2013年度第1号、155・156頁）。この中から、いくつかを取り上げ、紹介しておきたい。

1987年に京都で世界会計教育者会議が開催されるに先駆け、1984年に世界の会計学者が集まってIAAER（世界会計学会）が設立され、その初代副会長に就任されたのが中島先生であり、その後、関西学院大学でIAAERを国際会計研究学会と共催され、平松先生が世界会計学会の会長として活躍され、またアメリカ会計学会（AAA）副会長に就任されるなど、これほどまで国際舞台上で華々しく活躍され、日本の情報発信に貢献された会計人はほとんどおられなかっただけに、平松先生の我が国会計研究・制度の国際化に対する貢献は甚大かつ顕著であった。

こうした平松先生の国際会計の原点は、関西学院大学の専任講師時代に米国ワシントン大学で2年間を過ごされ、そこで国際会計研究の権威、ミューラー教授やチョイ教授との親交がその後のグローバルな舞台上での活躍の下地となったことであろう。日本人離れした英語でのジョークは、平松教授の英語コミュニケーション能力の高さの一端を示すものである。いま日本の会計研究のグローバル化がますます期待される中、平松一夫教授の傑出した功績を偲び、さらなる推進を次世代に期待するばかりである。

## 平松一夫先生を偲んで

橋本 尚（国際会計研究学会前会長・青山学院大学）

イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」  
（ヨハネによる福音書11章25節）

わが国国際会計研究・教育の第一人者であり、学校法人関西学院理事長、関西学院大学学長をはじめ、国際会計教育研究学会（IAAER）会長、日本会計研究学会会長、国際会計研究学会会長、企業会計審議会会長など国内外で数多くの要職を務められた平松一夫先生は、2020年12月2日、与えられた地上での歩みを終え、主によってみもとへと召されました。平松先生の生前の御功績を讃え、先生との思い出や教え・学びを記して追悼文と致します。

顧みれば平松先生との出会いは、1984年6月23日に本学会の設立総会が、そして、12月8日に第1回研究大会が、早稲田大学で開催された時であったと思う。当時、博士後期課程1年であった私は、学会開催の準備を初めて経験した。『外部情報会計：会計代替案選択問題の研究』（中央経済社）などの著作でお名前は存じ上げていたものの、干支が一回り上の先生に実際にお目にかかったことはなかった。

1987年10月7日～10日に国立京都国際会館で開催された第6回国際会計教育会議は、アジアで初めて開催された会計に関する国際会議であった。私の指導教授の染谷恭次郎先生が組織委員会

委員長を務められていたこともあり、私は、身近で補助者として駆け回っていた。平松先生は、第 I 分科会 c で「日本企業における会計教育・研究の役割」と題して報告された。この会議のアルバムには、レセプションで談笑されている 40 歳の先生の 1 コマが収録されている。会議の前後、シドニー大学のチェンバース先生やワシントン大学のミューラー先生など著名な先生が、早稲田大学で記念講演をされた。チャイムと同時に教室の扉を閉める増谷裕久先生と染谷先生の親交が深かったことやミューラー先生との関係もあり、平松先生も上京され、たしか新幹線のグリーン車に初めて乗車されたとお話しされていた。

1992 年 10 月 8 日～10 日には、第 7 回国際会計教育会議がアメリカのアーリントンのマリオット・クリスタル・ゲートウェイホテルで開催された。平松先生は、奥様と同伴で参加されたと記憶している。私が初めて参加した海外での国際会議であった。長年にわたってさまざまな国際会議や海外の学会に積極的に参加され、座長や報告者などの常連として多大な国際貢献をされてきた先生とは、その後も国内よりは海外でお目にかかる機会の方が多く、日本の国際的な立ち位置やプレゼンスなどについて、直々に親身に教えていただいた。

2000 年 10 月 6 日～7 日には、神戸国際会議場で、平松先生を準備委員長として、IAAER の第 3 回研究会議と共催で本学会の第 17 回研究大会が開催された。私は、自由論題で報告を行った。6 日の会員総会の最中に鳥取県西部地震があり、阪神大震災の記憶が一瞬頭をよぎった。「毎日大量の電子メールが送られてくるし、国際会議を主催するのはたいへんだ。これで最後にしたい。」と先生が本音を吐露されていたことを思い出す。学会後の 12 日に駿河台大学でミューラー先生の講演をお願いしていたこともあり、9 日には、ミューラー先生、平松先生、木本圭一先生、小池賢治先生（駿河台大学経済研究所長）と私で打合せを兼ねて祇園のお茶屋さんへ行き、舞妓・芸妓と楽しい一時を過ごした。ミューラー先生は、exclusive で private な体験とたいへん感激され、丁寧な御礼状をいただいた。

先生は若い頃から毎年アメリカ会計学会（AAA）の年次大会に参加されてきた。2001 年 8 月のアトランタ大会は欠席されたが、申込みをしていたので出席扱いとされ、連続参加記録が途絶えることはなかったというエピソードもある。

平松先生は、本学会の第 8 代会長（2002～2005 年）、第 9 代会長代理（2006～2008 年）を務められた。先生を通じて開催の打診があり、2007 年 11 月 23 日～25 日には、第 24 回研究大会を青山学院大学で私が準備委員長となって開催させていただいた。

2009 年 6 月 17 日～19 日には、平松先生からお誘いを受けて、聞慶で開催された韓国会計学会の年次大会に参加した。アジア諸国の学会との国際交流では、先方は会長が来日するのが通例であるが、日本からはなかなか行かない。日本は、個人的な関係や属人的な対応に終始しており、組織として対応する人財も十分でなく、国際交流の重要性が理解されていないと嘆いておられた。この年の 9 月に関西学院大学で開催された日本会計研究学会第 68 回大会で準備委員長を務められた平松先生は、会長に就任され（任期は 2012 年まで）、日本の会計基準、会計研究、会計教育のグローバル化に自ら範を示された。また、2010 年～2015 年には、日本人として初めて国際会計教育基準審議会（IAESB）の委員も務められた。

2014 年 11 月 13 日～15 日には、第 12 回世界会計教育・研究者会議が開催された。13 日にフィ

レンツェ市庁舎ヴェッキオ宮殿の中でもひととき荘厳な 500 人広間で行われた開会式で、平松先生は IAAER 会長（2013 年～2014 年）として挨拶された。まさに先生の国際的な晴れ舞台の 1 つであった。その瞬間に立ち会えたことは、とても光栄であった。

2016 年 1 月 9 日の「関西学院での 56 年～生徒・学生として、そして教員・研究者として～」と題する最終講義には私も駆けつけた。また、8 月 6 日～10 日には、AAA の 100 周年記念大会がニューヨークで開催された。平松先生は、9 日午前に日米欧の学会会長経験者としてバース先生、クリステンセン先生とともに全体会議 *Becoming a Learned Profession by 2036* に登壇された。これも先生の国際的な晴れ舞台の 1 つであった。また、同日午後には開催された *The Voluntary Application of IFRS in Japan and Considerations for Future Mandatory Application* と題するジャパン・セッションでは、モデレーターを務められた。当日の夜には関係者が寿司店で痛飲し、胸襟を開いた会話でジャパン・セッションの成功を祝った。帰国後、8 月 26 日～28 日に関西学院大学で開催された本学会の第 33 回研究大会であらためて御礼を申し上げるつもりでいたが、先生が体調を崩され、叶わなかった。しかし、2017 年 2 月 14 日の企業会計審議会・会計部会でご一緒することができた。

平松先生との出会いを神に感謝致します。天国で安らかに憩われますよう、心よりお祈り申し上げますとともに、本学会の一層の発展のために尽力することをお誓い申し上げます。

## 平松一夫先生を偲んで

杉本 徳栄（国際会計研究学会会長・関西学院大学）

### ■大切な 1 冊

書斎にはお気に入りの絵画などとともに、新刊書、研究課題の関連書、そして専門書に限らず、学生時代から感銘を受けた大切な本だけがある。これらが書斎の中心に座るわたしをいつも取り巻いている。蔵書が増え続けるなか、断捨離よろしく、機会あるたびにかなりの書籍を処分してきた。

『外部情報会計—会計代替案選択問題の研究—』（中央経済社、1980 年）は大切な 1 冊である。大学院修士課程のときに、恩師 吉田寛先生の博士学位論文の出版物でもある『会計情報の理論』（日本経営出版会、1968 年）を読み解き、その展開の先に位置する会計情報論や情報会計の最先端の研究成果が『外部情報会計』であった。向学心旺盛な当時、本書から受けた衝撃は今なお鮮明に蘇る。

その後、日本会計研究学会太田賞の受賞作『年次報告書会計』（中央経済社、1986 年）や『国際会計の新動向—会計・開示基準の国際的調和』（中央経済社、1994 年）などの優れた単著もあるが、その感動の大きさや影響力からすると、わたしは『外部情報会計』が好きだ。平松一夫先生の研究成果に初めて触れた著作である。

博士後期課程に入学後、恩師の指導により、韓国ソウルに所在する三大名門大学（SKY）の延世大学校（Yonsei University）大学院へ 1 年間留学した際に、日本から持ち込んだ数冊の本の 1 冊でもある。現地の書店で購入した本を読み進むうちにどうもどこかで読んだ記憶がある。持ち込ん

だ本と急いで照合すると、書名は異なるが一字一句まったく変わらない——『外部情報会計』の全訳書だが、原著者名は韓国の著名な教授。翻訳権取得などの記述はみられず、明らかに剽窃本である。当時ようやく著作権法が全面改正されて厳格になっただけに、探せば同じような本がいろいろと出てきたかもしれない（当時の日本でも、たとえば米国財務会計基準審議会（FASB）の報告書等の全訳なのに研究書として出版されたものもあったりしたが）。

平松先生に初めてご挨拶できたのは研究職に就いてからである。先の韓国版『外部情報会計』の件を話題にした際に、「まったく知らない。でもとても光栄だ。できればコピーを送って」との言葉に、先生のお人柄にも接した。後日、そのコピーをご覧になって、笑顔で「ホンマや」。

## ■人との繋がりの大切さ、そして国際交流

「韓国での知名度は杉本さんには完全に負けるは」——世界会計学会（IAAER）会長や米国会計学会（AAA）副会長など海外でも多くの要職に就かれた平松先生とともに、韓国会計学会（KAA）との国際交流で2006年から十数年にわたってご一緒してきたときの言葉が忘れられない。いつも簡潔な表現のなかにはなにかがしかのメッセージがある。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックによるリモートと巣ごもり生活で、海外の映画やドラマを視聴する機会も増えた。韓国映画『1987, ある闘いの真実』（張俊換監督<sup>チャンジュンファン</sup>, 2017年製作）は、語学力を維持することも兼ねて妻が準備した数編の1つだが、わたしは終始画面に釘付けになった。舞台はまさに留学時の延世大学校の新村キャンパスだ<sup>シンチョン</sup>。

内容については触れないが、学生運動の全盛期によくソウルに留学に来たねと、いまも友人たちが微笑み振り返る。催涙弾ガスが鼻腔や皮膚を刺すなか、皆よく勉強した。毎週末はきまってキャンパス前の歓楽街に繰り出しては盛り上がった。専攻分野を問わず、新たな人との繋がりや信頼関係が培われた若き日々だ。当時があるからいまがある。

平松先生とは、当初は日本でよりもむしろAAAの年次大会で毎年お会いし、ご一緒する機会が増えた。研究の場だけでなく、その後の場などでの交流をととても大切にしてくられた。人との繋がりを重視され、その輪は非常に大きなものだ。

次の話はあまり広く知られていない。韓国の会計基準設定主体である韓国会計基準院（KAI）／韓国会計基準委員会（KASB）からの要請で、平松先生に諮問委員会委員就任の打診があった。仲介役としてお伝えしたところご快諾され、数年間にわたって定期的にソウルを訪問し、韓国の基準開発にも貢献された。規定により旅費のみの支給のため、委員長が発案で会議の前後にセミナーなどを開催し、日本の会計事情等を紹介したものである。委員長だった徐正雨先生<sup>ソジョンウ</sup>（国際会計基準審議会（IASB）前理事、国民大学校<sup>クンミン</sup>名誉教授）は当時のことを振り返り、いまなお感謝の気持ちを示されている。

訃報をお伝えした際に、徐先生と朱仁基先生<sup>ジュインギ</sup>（国際会計士連盟（IFAC）会長、延世大学校名誉教授）からいただいた弔意のなかから、平松先生へのお言葉も添えておきたい——「彼は会計のグローバル化に多大な貢献をした国際的な研究者である」。

わたしたちには決して忘れてはならないことがある。



コア・スタンダードの設定作業計画を進めていた国際会計基準委員会（IASC）が設置した戦略作業部会は、IASCの組織改革を目的とした。ディスカッション・ペーパー「IASCの将来像」（1998年）や最終報告書「IASCの将来像に関する勧告」（1999年）を公表し、今日のIASBの礎を築いた。戦略作業部会は14名からなる。平松先生はそのひとりとして参加し、国際会計の発展に尽力されたことは特筆すべきことである。

関西学院とのご縁も平松先生からのものである。いつも胸襟を開き、信頼構築に向けて人と人との交流を大切にされ、真実一路の信念に燃える情熱と飾らないお人柄、その優しさにはお礼の言葉もなく、多くのことを学ばせていただいた。隣人・社会・世界に仕えるため自らを鍛えるという、関西学院のスクールモットーである **Mastery for Service**（奉仕のための練達）を体現されたお姿は脳裏に刻み込まれている。

平松先生とご一緒した年月は何物にも代えがたく、いまはキャンパスが寂しく感じる。

最後になりましたが、平松一夫先生に心より感謝をし、ご冥福をお祈り申し上げます。

## 30年にわたるお付き合いに感謝を込めて

山田 辰己（中央大学）

平松一夫先生と初めてお会いしたのは、今から30年前の1991年、パリの経済協力開発機構（OECD）で開催された会計フォーラムでした。平松先生は、パネリストとして参加されておられ、私は、会計基準を研究する財団法人企業財務制度研究会（COFRI）から参加していました。爾来、30年にわたって平松先生とはいろいろなご縁を結ばせていただきました。特に、パリでの出会いとレストランで飲んだ高級ワインの思い出は、平松先生ご自身もたびたび話題にされていて、先生と共有できた楽しい時間の思い出の1つです。

1992年に米国財務報告基準審議会（FASB）が呼びかけてFASBの事務所があるノーウオークで開催された第2回世界会計基準設定者会議<sup>①</sup>に平松先生と一緒にCOFIの理事長の代理として参加する機会を得たことは忘れられない思い出です。その前年6月に開催された第1回会議に続き、各国の会計基準設定主体それぞれが直面している問題を話し合い、協力して解決していこうという気運が盛り上がり、23か国10機関から94名が参加した大きな会議でした（IASC次期議長の前田栄一氏も参加されていた）。会議では、明示的に概念フレームワーク（CFW）が必要であるかという点や各国が直面している会計問題は何か（金融商品、外貨換算及びリースなどが多くの国から挙げられた）について議論されました。特に、国際的調和化が短期で実現しないことを考えると、国際的な市場での資金調達には、国際会計基準（IAS）及びCFWを使うことを主張する意見も出されました。この会議の参加者の多くが、その後、国際会計基準委員会（IASC）や国際会計基準審議会（IASB）の活動に参画していることを考えると、有意義な会議でありました。私は、その場で、COFRIを代表して、存在感を持った発言をされた平松先生の姿勢に多くのことを学ばせていただきました。会計基準のグローバルな調和化のために、主張すべきは主張し、他方で、お互

いの状況を理解し合うことの重要性を痛感し、この経験は私自身にとってその後の人生の生き方を決めるうえで大変貴重な経験でした。また、この会議の前日には、夕食もはさんで FASB 議長と個別会談を行い、COFRI の設立を含む日本の会計基準設定状況などに関する意見交換を行いました。これにより、翌年の FASB 議長の来日が決定し、また、FASB のヘッジ会計に関するリサーチ・レポートを COFRI が翻訳することも決まりました。帰路の飛行機の中で、これら一連の会議を通して、欧米の会計基準設定主体間で活発な交流があることを改めて痛感し、「日本もその一端に連なり、役割を果たさなければならない」と漏らされていた平松先生の言葉が今でも忘れられません。

平松先生は、現在の IASB の設立構想の作成にも関与されています。IASC の戦略作業部会のメンバーとして、1998 年 12 月に公表された「IASC の将来像 (Shaping IASC for the Future)」<sup>(2)</sup> の議論に参加され、それまで、各国の職業会計士団体がメンバーであった IASC を根本的に改革し、14 名の専門家からなる理事会 (IASB) を組織し、その専門家による国際会計基準 (現在の「IFRS」) の設定という枠組みの創設に貢献されました。これによって、各国の職業会計士団体をメンバーとすることによる政治的な要素の希薄化を図り、より会計理論に基づいた基準設定の枠組みが作られました。また、各国の会計基準設定主体とのより直接的な関係作りも図られることになりました。平松先生は、JICPA ジャーナルに掲載された論文で、ご自身の戦略作業部会での経験から、当時のグローバルな議論を主導している「G4+1」(米、英、加、豪に IASC を加えた会議体) という実態があり、「我が国が国際社会で影響力を保持することを意図するのであれば、より積極的に政策決定に関与する戦略をとることが肝要」であることを指摘されています。平松先生が感じられた危機感は、その後の関係者の努力で改善しているとも思われますが、しかし、我が国の立ち位置の在り方に関する普遍的な警句として心に留めておかなければならないご指摘であると強く共感しています。

アメリカ会計学会 (AAA) は、2016 年に 100 周年を迎えました。2016 年 8 月にニューヨークで開催されたその記念大会で、国際会計研究学会主催・日本会計研究学会協賛によりジャパン・セッションが開催されました<sup>(3)</sup>。このセッションの開催実現のために、平松先生は大変なご尽力をされました。日本における事前の準備会合でもテーマの選定などに大変な情熱を注がれました。テーマは、「日本における IFRS の任意適用と今後の課題」で、当日は、平松先生がモデレーターとして参加され、セッションの冒頭で、日本における IFRS の適用状況について話をされました。それに続いて、4 名の報告者がそれぞれの立場から日本の任意適用の現状などについて報告をし、その後報告者の間でディスカッションが行われました。このセッションには、IASB や FASAB の理事なども聴衆として参加し、セッション終了後彼らからは評価する声が聴かれました。

これまで、私が最も印象深く感じている 3 つの思い出を綴ってみました。1992 年という各国の会計基準設定主体間の連携の黎明期における日本からの発信、1998 年という IASC から IASB へとグローバル基準の設定の枠組みが大きく変化するときのその枠組み作りへの貢献、そして、米国基準とともに IFRS の 2 大グローバル基準としての位置が定まった後の 2016 年における日本の状況の対外発信と、平松先生は、この 30 年、その時代時代を導くリーダーとしての役割を果たされ、時代を駆け抜けられました。

次の時代のさらなる展開についてどのようにお考えだったかをお聴きできなかったことを残念

に思います。多くの感謝とともにご冥福をお祈りします。

**注**

- (1) 平松先生による会議報告は、COFRI ジャーナル No.9 (1992.12) の 36 から 57 ページに掲載されている。
- (2) この内容などについては、平松先生が執筆された『IASC の将来像』の内容と我が国への影響」(JICPA ジャーナル, 1999 年 3 月号 (Vol.11No.3) で説明されている。
- (3) ジャパン・セッションの報告内容は、「国際会計研究学会年報—2016 年度第 1・2 合併号 (通号 39・40 合併号) —」123 から 184 ページを参照されたい。